



Title	<翻訳>フワン・デ・サンタ・クルス・パチャクティ・ヤムキ著『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』(2)
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	Estudios Hispánicos. 2000, 24, p. 85-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(史料翻訳)

フワン・デ・サンタ・クルス・パチャクティ・ヤムキ著

『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』(2)*

Juan de Santa Cruz Pachacuti Yamqui
Relación de Antigüedades de este Reino del Perú

染 田 秀 藤

このシンチ[“部将”という意]・ロカは父親から受け継いだ領土一帯の統治に着手した。彼は畑仕事をしたり、服を作ったりするのをこよなく愛し、部下には銀鉱山や金鉱山の探索を命じた。シンチ・ロカはあまり軍事活動には携わらなかった。と言うのも、彼は背がとても高く、しかも怖気を催させるような容貌をしていたからで、ほとんど外出しなかったのである。彼はことに館の造営に関しては、実に熱心で、かなり力を注いだ。また、シンチ・ロカのもとには、すべての地方から、チャカマルカやアンガラエスからも、贈り物が届けられた。彼は征服遠征の実行を思いつくと、配下の部将や兵士を派遣したが、その際、起伏の激しい場所ごとに砦を建てるため、石を運搬させたいらしい。

インディオたちの話によると、そのころ、あるインディオの呪術師が将帥の一人に乗りうつり、彼の口を借りて部下たちに、先記の砦をアパチタと呼ぶよう命じ、掟をひとつ定めた。つまり、先に記した目的[砦の建設]を必ず実現するため、その道を行く人は各自、大きな石を持参し、そこに置いておくよう命じられたのである。さらに、呪術師はインカに仕えるその部将に向かって、兵士は一人残らず、通過するはずの丘に向かって、「わたしはくたびれた。疲れよ、これ以上つきまとわないでくれ。わが身の^{いたずき}労も」[原文はケチュア語]と呟きながら、コカアチョ(噛んだコカ)を吐き出さなければならないと告げた。そのとき以来、人々は石を持参し、コカを吐き出すようになったらしい。と言うのも、例の呪術師が大びらにいつもそのように振る舞ったからである。すると、アパチタもしくは丘が(その中から)彼らに向かって、「よかろう」と答えたことがしばしばあったという。そういうことがあって、昔の哀

* 本稿では、紙幅の関係上、通説にいう第二代インカ王シンチ・ロカから第七代のヤウル・ワカックまでを訳出する(原文：9r=p.24～17v=p.55)

れな人々はアパチタを信仰した。

インディオたちによれば、そのころ、すでにかなり高齢に達したマンコ・カパックは息子の繁栄を祈るとき、いつも跪いて次のように祈った(それは年老いたマンコ・カパックが天地の創造主の所在を突きとめるために創作した祈りの言葉であった)。

「ああ、万物の源、ピラコチャよ。“これぞ男、これぞ女なれ”と言いながら、[人類を]創り給いし主よ。[世界の]すべての地を創り給いし主よ。あなたはどこにおられるのですか。わたしには、あなたのお顔を拝することはできないのですか。あなたの玉座は天の高みにあるのですか、地上にあるのですか。それとも天と地の間にあるのですか。お願いです、お答えください。天上に横たわる広漠たる海を[創世記1:7 “神は大空を創り、大空の下と上に水を分けさせられた”]、また、いまわたしが暮らしているこの世界を創り給いし主よ。人類の創造主よ。あなたの僕であるわたしたちは目が霞むほど懸命にあなたのお姿を捜し求めているのです。あなたのお顔を拝したいのです。わたしがあなたのお顔を拝し、あなたのことを知れば、また、わたしがあなたのことを理解し、了解すれば、そのとき、あなたはわたしをご覧になり、わたしのことをお知りになられるでしょう。太陽と月、昼と夜、夏と冬は原因[第一因=神]なくして存在するものではありません。それらは、[神に]支配され、定められたとおりに動き、決められたところへ至るのです。わたしに国王の杖を手にするよう取りはからわれたあなたはいったい何者なのですか。お願いです。わたしが疲れ果て、生涯を終える前に、どうかお答えください。わたしのいうことに耳を傾けてください。」

[原文はケチュア語]

そのあとで、マンコ・カパックはいつもトナパのことを思い出して、こう語った。

「あなたは人類の創造主に仕える僕の中の僕に違いないと言われています。ですから、お願いします。通りすがりにわたしをクスコの王にされたお方よ、タラパカよ、トゥナパよ、どうかわたしのことを思い出してください。後生ですから、たとえわたしが身罷っても、あなたが通りすがりに王とされたわたしのことを忘れないでください。そして、わたしが亡くなったら、わたしの魂を励まし、誉め称えてください。わたしはどれほど、あなたから創造主の正体を知りたいと思ったことでしょう。ハピニューニョたちを打ち倒し、破り、追い払ったのはあなたなのでしょう。もし神を知っていれば、もし神を理解していれば。わたしを土で形づくり、創造されたあなた、どうかわたしをご覧ください。あなたはいったい何者ですか。もはやわたしは数え切れないほどの年を重ねた老人です。」[原文はケチュア語]

そう呟くと、マンコ・カパックは、もしかすれば幸運にも創造主の姿を見つけ、創造主に出会えるかもしれないと思い、それを確かめるために儀式をはじめた。つまり、彼は白い子羊[リヤマのこと]を一頭、祭壇のようなものの上で火あぶりにするよう命じたのである(子羊のことをアルパイといい、この土地の子羊を捧げる場合はアル

パイ・アルパコイ、少年を捧げる場合はアスパコイと呼ばれる)。[しかし]マンコ・カパックにはなにも見えなかったし、誰ひとり、彼の祈りに答えるものもいなかった。そのため、彼は時を移さず、自分の息子一七、八歳の息子たちの中でもっとも見目麗しい子供一をアスパコイにするよう命じた。すなわち、子供の首を切り落とし、流れ出る血を燃え盛る火の中へ注いだのである。それは、血が煙となって天地の創造主のもとへ届くのを願ってのことであった。[しかし]そのような儀式を執り行っても、コリカンチャにおいて、マンコ・カパックに答えが告げられたためしはなかった。

その後、マンコ・カパックがタリパナク、すなわち、住民調査をするために定期的な巡察を行ったところ、一人前の男性として兵役につくべき年齢である十七から十八歳に達した若者が相当な数に上った。そこで[一人前の男性には]、白地の下穿きが与えられることになった。そのため、マンコ・カパックは一計を案じた。つまり、若者たちを遙か彼方に屹立するワナカウリと呼ばれる、じつに高い丘まで走らせることにしたのである。そして、その丘の頂上に、リヤサイワナ[すばしこい小鳥の一種]、アワンカナ[黒鷲の一種]、鷹、ハチドリ、禿鷹などを放すように命じた。さらに、その丘には、スリ[ダチョウに似た鳥]やビクーニヤ、アニヤトウーヤ[小狐]やルイチョ[鹿の一種]も放された。その後また、マンコ・カパックは蛇やヒキガエルなども解き放すよう指示した。

マンコ・カパックがそのように小鳥や鳥—その他、先に記したようなもの—を放すように命じたのは、若者や少年たちに捕獲させて持ち帰らせるためであり、その目的はもっぱら彼らの性格、敏捷さや臆病ぶりなどを見極めることにあった。そして、ワラチクイ[ワラチコともいう]の褒美[通過儀礼を終えた証拠]として、敏捷な若者には、金や銀、それにカマンティラス[鳥の羽]で作った下穿き、臆病者には黒地の下穿きがそれぞれ与えられた。

マンコ・カパックは下穿きの分配を命じたあと、序列にしたがって若者たちに衣装をあてがうよう指示し、それから、彼らを他の男たちと同席させた。そうして、それ以後、若者たちは「一人前の男」を名乗ることになった。すると、若者の親たちは数多くの贈り物を携えてマンコ・カパックのもとへやって来て、その素晴らしい企てに感謝した。マンコ・カパックは、若者の親たちが至極満悦しているのを知り、彼らに食事や飲み物をふんだんにふるまうよう命じたが、それは、以後、自分や息子シンチ・ロカに臣下として従う義務を負わせるためであった。

やがて間もなく、マンコ・カパックは十六歳になった娘や少女に、髪を梳き、ウインチャ[リボンのような紐]をつけるよう命じた(この儀式はキクチクイと呼ばれている)。それから、彼女らにリャンキ(つまり、靴のようなもの)を履くように命じた。そうした儀式はすべて、それ以後彼女たちが「一人前の女性」(タスケ・ワルミという)

を名乗るため、また、人々からもそう呼ばれるために執り行われた。それから、マンコ・カパックは三〇歳になった若者全員に妻を娶らせ、そうして、男には武器、妻には鍋、ブチュカ[お椀]、壺やラオカナ[火箸のようなもの]をそれぞれ分け与えた(これはワルミ・アピイパチャ、カリ・チャスキパチャと呼ばれている)。

それから、マンコ・カパックは品行方正の男たちを選ばせ、彼らに[カトリックの]司祭のように、天地の創造主の名を呼び、その居場所を突きとめ、創造主のことを理解させようと考えた。と言うのも、マンコ・カパックは、息子のシンチ・ロカには信仰心が欠けていることを察知していたからである。マンコ・カパックはまるで司祭に対するように、その選ばれた男たちに次のような指示を下した。

「心地よい言葉、心地よい言葉使いで、夜も昼も絶え間なく、彼[創造主]の名前を呼びつづけなさい。食を断ち、創造主を待ちのぞみなさい。そうすれば必ず、人類の創造主、万物の創造主は、その居場所は定かでなくとも、喜ばしいことに、また、幸いなことに、御座からあなたの言葉に耳を傾けられ、あなたに答えて下さるでしょう。それゆえ、あなたはいつまでも、その勤めにひたすら身を捧げなければなりません。」[原文はケチュア語]

そうして、選ばれた男たちは寝ても覚めても、まるで司祭に与えられたような勤めを果たしたが、神から答えなど授かったことがなかった。そうこうしている間に、老マンコ・カパックは息を引き取った。老マンコ・カパックが亡くなると、その息子シンチ・ロカが領地を受け継いだが、すでに記したとおり、彼はじつに尊大な人物であった。

シンチ・ロカの時代、互いに激しく愛しあう若い男女が数組いることが判明した。インカはそのことを知って、若い男女にその理由を問い質した。すると、彼らは公然と、[誰にも二人を]離れ離れにすることはできないと告白したという。さらに詮索してみると、愛し合う若者たちが真ん丸い小石を持っているのが分かった。彼らはその石について尋ねられると、石はソンコ・アパ・チナコック[“魂を奪うもの”の意]、ワカ・チナコック[ワカンキ=霊験あらたかなものの総称]と呼ばれていると答えた。それ以来、水滴や藁や棒切れなど、数多くのものが小石と同じように[霊験あらたかなものと]考えられた。

インディオたちの話によると、^{らんる}檻樓をまとった一人の貧しいリヤマミチ[牧童のこと]がインカ、シンチ・ロカの館へ入り込んだことがあった。すると、インカにこよなく愛された娘がその貧しいインディオの後を追って[館を]出て行ってしまった。二人の姿が見えなくなったので、インカは搜索を命じた。結局、二人とも捕まり、インカのもとへ連行された。インカは二人を拷問にかけよう命じた。娘は[拷問に耐えかねて]リヤマミチに愛を奪われたと白状した。とうとうその貧しいインディオも[隠し持っていた]悪魔から授かったワカンキを見せなければならなくなった。彼はイ

ンカからワカンキを手に入れた場所を尋ねられ、洞窟の中で悪魔と契りを結んだと答えたという。

シンチ・ロカは人類の仇敵である悪魔のことをまったく理解していなかったので、例の小石をいくつも手に入れた。その結果、以前〔その貧しい〕インディオに降りかかった以上のことがインカの身の上に起きた。インディオたち、つまり、彼の臣下もワカンキを手に入れようと躍起になった。そのとき以来、数多くのワカがいくつもの丘や泉に現れ、大勢の人たちが恥ずかしげもなく偶像を崇拜するようになったらしい。そして、シンチ・ロカは村やその地区ごとに、〔偶像に〕生け贄を捧げる人を配置しておくよう命じた。とどのつまり、もはやワカの入る余地がなくなるほど、どこもかしこもワカだらけになった。シンチ・ロカの時代に、人間の血や白い子羊、ウサギを生け贄に捧げ、コカやムリヨ〔ムリュ貝。先スペイン期のアンデスで、宗教儀式に重用された〕、獣脂やサンコ〔トウモロコシの粉で作った団子〕を供える習慣がはじまった。

話によると、その哀れなシンチ・ロカはいつも気ままな暮らしを送っていた。彼は部下に命じて、チョタルポ・ワナルポ〔同性愛者のことか〕を探し求め、姦淫に溺れていたらしい。そういうわけで、〔インカのもとには〕数多くのワカンキがあった。インディオたちが贈り物として持参したからである。〔それでも〕その哀れなインカには、インカ・リョケ・ユパンキという名前の息子しかいなかったという。

シンチ・ロカは最後には立派な男となって息を引き取り、後継者にリョケ・ユパンキを残した。伝えられるところでは、リョケ・ユパンキはとりわけよく断食を行い、高齢に達するまで女性と交わろうとせず、姦淫や泥酔を禁止し、畑仕事に精を出した。リョケ・ユパンキは祖父〔マンコ・カバック〕と違って、征服遠征をほとんど企てなかった。とは言え、老齢に達してから、彼は敵を威嚇するために軍隊を組織し、領地を巡察した。

インディオたちの話では、リョケ・ユパンキは配下の男たち全員に、顎髭を抜き、自分と同じように、髭をたくわえないよう命じた。

また、リョケ・ユパンキは自分に従うすべての地方の人々に対して、赤ん坊の頭を〔板で〕縛りつけるよう命じ、頭部が細長く、額が広くなるよう指示したが、それは、彼らが〔行く末〕従順な人になるのを願ってのことであった。

同じく、リョケ・ユパンキはアクリヤ〔選ばれし処女〕のために館を建設するよう命じた。アクリヤには、四つの種類があり、それぞれ、ユラック・アクリヤ、ワイルル・アクリヤ、パコ・アクリヤ、ヤナ・アクリヤと呼ばれている。話によると、その四種類のアクリヤにそれぞれ、一軒づつ館が指定されたという。一番目のアクリヤ〔ユラック・アクリヤ〕はウィラコチャン・パチャ・ヤチャチと呼ばれる創造主に、そしてワイルル・アクリヤはそのユラック・アクリヤにそれぞれ仕えた。パコ・アクリヤは〔地方の〕

アポ・クラカ^カの妻、ヤナ・アクリヤは一般のインディオにそれぞれ仕えた。同じように、女性と交わることのないよう育てられた少年も大勢いた。その少年たちはやがて兵士として〔インカに〕仕えたが、とりわけ彼らが活躍したのはリョケ・ユパンキの子供〔マイタ・カパック〕の時代のことである。

インディオたちの話では、インカ・リョケ・ユパンキはかなり年をとり、老衰したころ、ママ・タンカライ・ヤッチ・チンポ・ウルマ・クカという、タンカル村のクラカの娘と結婚し、一子をもうけた。つまり、彼女は〔結婚して〕1年後にインカ・マイタ・カパックを産んだらしい。また、そのマイタ・カパックは母親の体内にいますとき、よく泣いたという。マイタ・カパックに関しては、生後数カ月で言葉を話しはじめたと言われている。さらに、彼は十歳の子供のころ、勇敢に戦い、敵を打ち負かしたとも伝えられる。そういうわけで、インディオたちの話では、マイタ・カパックはじつに巧みに人々を治め、道徳上の規則やさまざまな法律を作り、陋習を禁止し、さらにそれ以外にも、ごく普通の問題に対処するための数々の規準の制定や、インディオ女性が隠棲するための館〔アクリヤワシ〕の建設にも着手した。

このマイタ・カパックは聖なる福音の伝道を予言し、福音を称え、それは人々に大いなる利益をもたらすことになるかと告げたという。さらに、彼は自分の亡きあと、〔直系の〕子孫による支配、子孫の治める王国はいくつもの時代を経てマンコ・インカ二世〔1536年、スペイン支配に抵抗して決起し、アンデス山中のビルカバンバに立てこもり抵抗運動を指揮するが、44年半ばスペイン人に暗殺される〕の時代まで存続すると予言したらしい。マイタ・カパックの予言によれば、王国は繁栄を極めるが、最後には兄弟同士がくりかえし干戈を交える事態に至り、その結果、王国は全滅し、大量の血が流されることになるという。

マイタ・カパックは青年のころ、王国にあった偶像、つまり、ワカを一つ残らず、クスコの町へ持ってくるよう命じ、そのとき、盛大な行列と祭りを催すと約束した。〔しかし〕彼は、すべてのワカ、偶像が手元に集まったのを知るや、〔約束を反故にして〕ワカを崇拝する人^{ムチヤドール}たちを激しく愚弄した。つまり、マイタ・カパックは集まった偶像、ワカを一つ残らず使ってある館の土台を築いた。それだけのために、わざわざ館を建設したのである。インディオたちの話では、偶像やワカの中には、炎や風となって逃げ出したのもたくさんいたが、それ以外にも、例えばアイサウィルカ、チンチャイコチャやカニヤル人のワカ、それに、ヴィルカノタ、プティーナ、コロプナ、アンタプク、チュキワクラ、チョケピロのように、小鳥に姿を変えて飛んでいったワカもいた。インカがそのようにワカを嘲弄したのを知って、土地の人々はみな、かつてないほど震えあがったという。

インディオたちによれば、このマイタ・カパックは偶像の不倶戴天の敵であり、

配下の人々全員に、太陽や月をはじめ、〔自然界に〕存在するものはすべて、人間の役にたつよう支配されていると告げ、太陽や月には目もくれないよう命じたという。〔したがって、マイタ・カパックの治世では、〕彼の祖父〔シンチ・ロカ〕の時代とは異なり、ふだん偶像崇拜の儀式がおおやけに執り行われることはまったくなかったらしい。

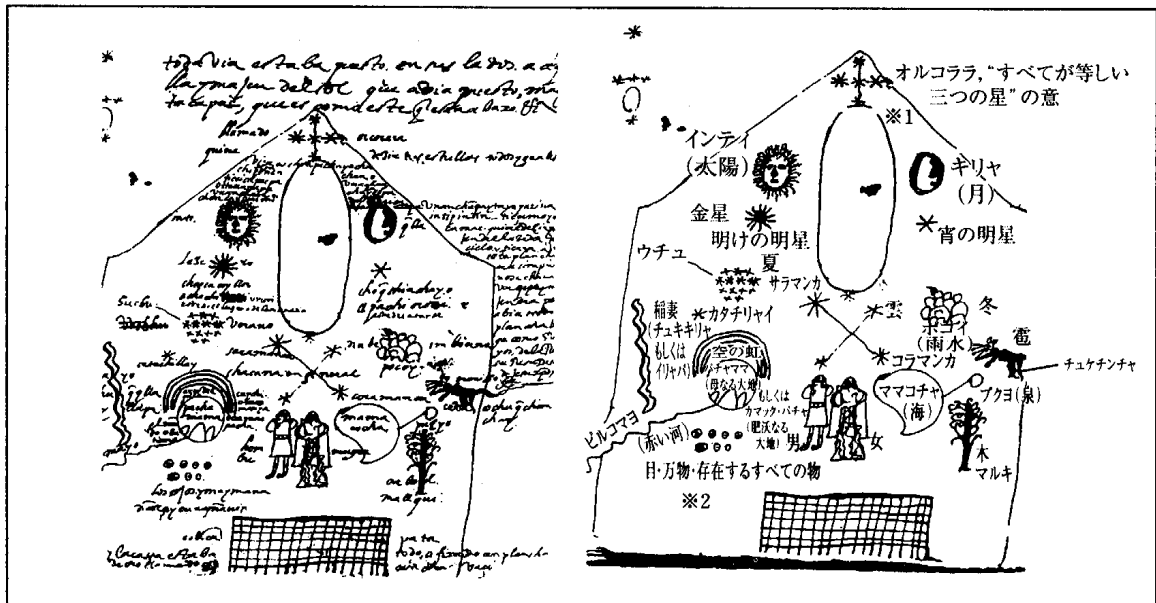
このインカは禁忌を破った人たち(呪術師、カウチョ、ウモ、ライカ)や、ワカムチャ〔ワカ崇拜者〕、カパック・ライミの祭りの中で最も重要な日(それは創造主であるティクシ・カパックに感謝する日であり、そのためカパックチャイと呼ばれている)に働いた人たち、インカとその先祖に敬意を払わなかった人々、姦通者や嘘つき、姦淫を犯した者、獣姦や男色に耽った者、泥棒、追いはぎや殺人者、反逆者、泥酔者、怠け者、口汚い人、ウイサ〔予言者〕に対して、厳しい裁きを下した。さらに、マイタ・カパックは、不当な戦争はあってはならないと定め、すべての人に集まって暮らすよう命じた。そのうえ、彼は全員に、畑を開墾し、キンチャ〔^{チャクラ}柵、囲い〕を設けるよう指示した。また、マイタ・カパックは村ごとに境界を示す標石を置くよう命じ、その境界石を壊した者には罰が下された。そういうわけで、〔マイタ・カパックの時代は〕太平の世だったという。

インディオたちの話では、このマイタ・カパックは容姿の点では歴代インカの中でもずば抜けていたが、父ほど健康に恵まれず、短命であった。

マイタ・カパックは、かつて曾祖父〔マンコ・カパック〕が据えた例の黄金の板〔*Estudios Hispánicos* No.23 1999. p.190の図1を参照〕を作り直すよう命じ、それをもともと黄金の板があった場所にふたたび取り付け、コリカンチャの館を新たに改築した(そして、その周囲、つまり、黄金の板を取り囲むよう、一面に、彼ら異教徒たちの〔崇めていた〕ものを配したという。それについては、お分かり頂けるよう、あとで素描することにしよう)。そうして、マイタ・カパックは部下に、この上なく修辭を凝らした言い回しを考え出して、カヨ、トルマ、アイマ、ワリナといった頌歌や賛歌を創作するよう、つまり、新しく作るよう命じた。また、彼はカパック・ライミの祭りのために大太鼓を作るように命じた(それは、マイタ・カパックが万物、すなわち、〔地上における〕人間、〔天上における〕太陽、月といった、この上なく崇高な自然界の要素や被造物に目もくれず、もっぱら悟性にもとづいて、全能なる主、〔世界の〕支配者、創造主〔の存在〕を認識していたことを示している)。

次に、聖なる福音がこの王国に伝えられるまで、それら〔異教徒の崇めていたもの〕が〔コリカンチャに〕どのように配置されていたか、その様子を素描することにしよう。もっとも、福音が伝えられたころ〔1533年〕、〔マイタ・カパックが新しく作らせた〕黄金の板はなくなっていた。と言うのも、ワスカル・インカ〔スペイン人がアンデスに侵入する直前、異母兄弟にあたるアタワルパと王位継承をめぐって対立したインカ〕がその黄金の板を取り替え、新しく別に、光の筋のついた、太陽のような円形の板を作り、そこに取り付けたから

である。とは言え、まだそのとき、マイタ・カパックが取り付けた太陽の像は新しく作られた黄金の板の傍らに置かれていたという。

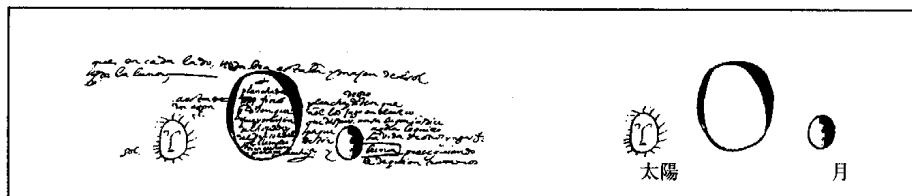


〔図1〕

*1. ビラコチャ・パチャ・ヤチャチの像。万物の起源、もしくは万物の創造主のしるし。世界の創造主、“これぞ男、これぞ女なれ”と言われたお方を思い出させる像。トナパを僕の中の僕として従えるお方の像。太陽の中の太陽。この板は飾り気のないものだったが、それが何を象った像であるかは明白であった。と言うのも、かつてこれはイエス・キリストの復活の光のように、大きな板だったからである。

*2. コルカンパタ、コリカンチャと呼ばれる館には黄金の板が張りつめられていた。

すなわち、ワスカルは創造主の像が置かれていた場所、つまり、真中に、別の板を太陽の像として取り付けしたが、だからといって、創造主の像を取り外したわけではなかった。つまり、その当時まだ太陽の像と月の像はその両脇にあったのである。



〔図2〕

純金の板は、インディオたちの話では、創造主、つまり真の太陽[太陽の中の太陽]、ウィラコチャ・パチャ・ヤチャチと呼ばれる太陽の像であった。

(その黄金の板を、あるスペイン人[マンシオ・シエラ・デ・レギサモ]がクスコで賭けの質に出したらしい。その件については、しかるべき箇所後述することとし、ここでは話をマイタ・カパックに戻し、他のインカの生涯に言及することにしたい。)

インディオたちの話によると、マイタ・カパックは実に博学な人物で、薬草に関しても、また来るべき時代、未来の事柄に関しても、ことごとく理解していた。彼はカパック・ライミ・ウィラコチャン・パチャ・ヤチャチの祭儀を厳粛に執り行った。祭りはまる^{ひとつき}一月の間、実に厳かに挙行された。マイタ・カパックは祭りが催されていた間、日々、夜の帳が降り始めると、しばしば次のように語ったという。

「ああ、祭りはなんと早く終わるのだろう。もはやわたしたちに残されているのは死だけである。いま、夜が更けていくのと同じように、死は必ず訪れる。夢、それは死の仮の姿である。」

彼はさらに言葉をつづけて、こう言った。

「祭りもまた、真実の宴会[「神の国での宴会」のこと]の仮の姿である。いつの日か、その永遠なる宴会に加わり、創造主の名を知り、その知識を身につけるようになれば、その人たちは素晴らしい至福を得ることになる。」

インディオたちによると、マイタ・カパックはつねづね、人は獣のように死ぬわけではないと語っていた。彼はそのことを忘れず、トコカチ[クスコ市内の居住区]で断食を行い、大声で泣いたという。そのとき、マイタ・カパックは日に、トウモロコシの実を穂軸の一行分だけ口にしたらしい。彼は一年のうちまる一か月間、昼夜を分かたず、断食をして過ごしたと伝えられている。

このマイタ・カパックには、ママ・タンカライ・ヤッチとの間に、カパック・ユパンキという名の息子がいたが、彼以外にも、アボ・タルコ・ワマン、インティ・コンティ・マイタ、オルコ・ワランガという息子たちがいた。マイタ・カパックの死後、彼の血を引く子孫の数はかなり増え、現在、その子孫はウスカ・マイタ・アイロ[原文のままアイユのこと]とアワイニ・アイロに属している。とは言え、嫡男は先記のカパック・ユパンキで、彼はとても武芸に秀でたので、父マイタ・カパックの亡き後、偶像をこよなく崇拝するクラカや有力者が大勢一中には恐れをなして、あるいは、インカの寵愛を得るため一彼に服従した。彼らがカパック・ユパンキに服従したのは偶像やワカを崇拝するためであり、その結果、カパック・ユパンキの純粋な意図は挫折してしまった。

このインカの時代に、カパック・ワカ・コクイ[カパック・コチャ]という供犠が考え出され、汚れない少年が金や銀と一緒に埋葬されたという。また、白い子羊と同じように、人間の血を生け贄に捧げることもはじめられた(これはワカルパニヤと呼ばれた)。つまり、テンジクネズミ、あるいは、ウサギ、樹脂や人間の血で生け贄が行われたのである。

あるとき、インカ・カパック・ユパンキは、自分の仲間とワカが言葉を交わす様子を一目見たいと思ったらしい。[その当時]アンデス方面に位置するカパクヨ村[現在キ

スピカンチス県に属する]に、わざわざワカのために建てられた館があったので、カパック・ユパンキはその村へ出向き、館の中に足を踏み入れた。[そのとき]その青年インカは自分の周りにいた偶像崇拝者たちに向かって、なぜ扉や窓を締め切り、暗くして館の様子が分からないようにするのか、その理由を尋ねた。すると、その場に居合わせた人たちは全員、インカにこう答えた。「こうして、ワカ(全能の神の名だたる敵)を呼び出すのです。さあ、なにも仰らず、いないふりをしてください」と。それを聞いて、インカ・カパック・ユパンキは口を噤んだらしい。やがて、彼らが悪魔の名前を呼びおえると、悪魔は風の唸るような音をたてて姿を現した。そのとき、彼らは一人残らず、寒さと恐怖で、汗を流したらしい。すると、若者一つまり、新しいインカーは彼らにこう命じたという。

「扉と窓を開けなさい。おまえたちがこれほど恭しく、また、仰々しく、[姿を現すのを]待ちこがれたこ奴の顔か風貌を知りたい。」

彼らは扉を開けるた。すると、悪魔はなかば驚いて顔を隠し、一言も答えることができなかった。さらに伝えられるところでは、恐れを知らないカパック・ユパンキが悪魔に向かって、「名を名乗れ」と命じたところ、悪魔はじつに恥ずかしそうに、「カニャクアイ・ヤウィルカ」と答えたらしい。さらに、インカは言葉をつづけ、悪魔に向かって以下のように言ったという。

「なぜそんなにおどおどし、恥ずかしそうにするのだ。おまえは、われこそ子供を授け、財産を与え、生命を吹き込み、ソンコ・イリヤスやワカンキ[お守りや護符のようなもの]を靈験あらたかなものにしたと揚言していたのではないのか。それなのに、なぜ犯罪者のように、目を伏せているのだ。つまるところ、言わせて貰うが、おまえは偽善ぶって人を誑かす輩と変らない。もしおまえに力があるのなら、少なくともびくびくしたり、俯いたりしないだろう。だから、父マイタ・カパックも言っていたように、わたしは、[おまえとは]別に、万物の強大な創造主がおられると信じている。」

さらに、インディオたちの話によると、悪魔は実に醜悪な顔つきで、悪臭を放ち、その髪の毛は非常に太くてちぢれ、じつに恐ろしい姿をしていた。結局、インカはカニャクアイを言い負かしたらしい。つまり、悪魔はまるで雷鳴のごとく大声を上げ、稲妻のようにすばやく館を立ち去った。それ以来、ワカというワカはすべて、いつも歴代のインカに恐れを抱き、歴代インカもまた、創造主の名のもとに悪魔払いに似たヤカルカイを行うのを慣わしにしたという。その儀式の際、インカはこう告げたらしい。

「天と地、そして広漠たる海を創り給いし主の名のもとに、全知全能であり、万事を見通し、恐るべき言葉をもち、“これぞ男、これぞ女なれ”と言いながら[人類を]創造された主の名のもとに、おまえに命じる。[答えよ]いったいおまえは何者なのか、

おまえは誰なのか。さあ、言ってみよ。」[原文はケチュア語]

話によると、歴代インカはそのような言葉を口にしてワカをことごとく震えあがらせた。とは言え、彼らはワカのために相変わらずカパコチャ・コクイ[少年の生け贄]を行っていたらしい。もし歴代のインカたちが福音の掟を知っていたら、どれほど神を深く、また、心から信じたことだろう。と言うのも、当時、人々が文字をもたず、単純かつ無知で、愚鈍だったことを幸いに、悪魔や悪霊たちが苦もなく彼らをわがものとし、絶対的な支配者になりすまし、幾久しく圧制者として振舞っていたからである。

このカパック・ユパンキには、妻のママ・コリ・イルパイ・カワとの間に、インカ・ロカという息子がいた。話によると、その子が誕生したとき、盛大な祭りが執り行われたらしい。もっともカパック・ユパンキは偶像を崇拝する人たちとの交際を避けただけではなく、[支配下に置いた]人民がそれぞれ、独自のワカを崇拝するのを容認していた。

インディオたちによると、そのころ、カパック・ユパンキは、かつてトナパという高德の士が辿り着いた所、つまり、ティティカカと呼ばれる場所を探しに行く決心をし、そして、その水を持ち帰り、トナパを称える言葉を呟きながら、生まれたばかりの王子インカ・ロカをその水で聖別した。さらに伝えられるところによると、いくつかの剥き出し岩の上に泉があり、そこには、まるで盃のように、カプク・チャナ・キスピ・ストック・ウノと呼ばれる水が湛えられていた。そして、[カパック・ユパンキ亡きあと]歴代のインカはよく、その水を小さな瓶(コリ・カカと呼ばれる)に入れて持ち帰るよう命じ、その小瓶をアウカイパタ、クシパタと呼ばれる、クスコの広場の中央に供えるため、目の前に置き、トナパが触れたその水を称えたという。

そのころ、話によると、アシーリョとオルー口のクラーカがカパック・ユパンキに、昔、痩せこけた哀れな老人が[その地方へ]やってきたときの様子を話した。老人は髭だらけで、女性のような[長い]髪をし、長い肌着を身につけ、行く先々の村で人々を前によく教えを説いていたという。クラーカたちはインカに、その男はトナパ・ウィインキラと名乗っていたと語った。インディオたちの話では、そのトナパ・ウィインキラは誰よりも上手にその土地の言葉を話し、悪魔アピニユニョの像、すなわち偶像を一つ残らず、万年雪を戴く人跡未踏の山(リョケム・ケナマリス)の方へ追放した。

その後、クラーカもオレホン^{イストリアドール}[インカ貴族]の語り部たちもこぞって、カパック・ユパンキにそれと同じ話を伝えたい。つまり、先記の人物と同じトナパがワカや偶像を一つ残らず、アウサンガテ、キヤンカタ、サルカントイ、ピツシライという名の山の方へ追い払ったのだ、と。アウカイパタの広場には、タワンティンスーヨ[“四つの地方からなる世界”の意]のクラーカたちが治める各地方の[名をとった]場所や

居住区があり、〔クスコにいた〕地方出身の人々は例外なく、〔出身の地方名がつけられた〕場所や居住区に住んでいたが、〔クスコにいた〕ワンカ人とチンチャイスーユの人々も、トナパ・ワリウィルカは自分たちの所にもやってきて、住家として陋屋を建てたと話したらしい。さらに彼らは、そうこうする間にトナパはアトゥン・ハウハ・ワンカの数々の地方で崇められていたワカ、偶像やアピニュニョをことごとく、かなり激しく愚弄し、非難したあと、追い払ったと語ったという。すなわち、トナパ・ワリウィルカはワカや偶像を一つ残らず追放し、パリアカカやワリヤーリョに聳えたっているような、雪をかぶった、凍てつくような山へ追いやったのである。

偶像たちはトナパに追放される以前、土地の人々に甚大な害を加え、大人や赤ん坊を連れ去り、強奪し、ついには消し去ったらしい。また、偶像たちはしばしばクラーカたちに、人の身体を生け贄に捧げるよう脅した。その結果、クラーカたちはこぞって、「ワカは残酷な敵だ…」〔原文はケチュア語〕と叫んだという。(結局、なにごとにせよ、嘘は、遅かれ早かれ、必ず露見する。つまり、悪魔は嘘や偽善を考えだした張本人であり、真実や言葉は神のものである。なぜなら、その真実は決して消え去ることがなく、人々の心の中にいつまでも真の神、被造物すべての父としてとどまるからである。)

話によると、カパック・ユパンキは、トナパが建てた小屋に召使を常置させ、小屋の修理を命じたという。インディオたちの話では、トナパの小屋は小高い丘のふもと、川のそばに建っていた。もっと正確に言えば、小屋はクスコからハウハ盆地へ通じる街道に建っていた。さらに、昔はその小屋へ行き着くまでに、ぴったりと重なり合った二つの大きな石があったという。それはアタイ・イマプラン・タピアという名前の女性のワカで、彼女はワンカのインディオと密通したため、トナパに姿を石に変えられたらしい。話によると、その後、ワイナ・カパックの治世に、その二つの石はワカンキ・ソンコ・イリャラだと言われた。同じように、そのころ、ハウハの高原地帯でも、ワカンキが発見され、パチャカマク方面でも、髪の毛のようなワカが地中で見つかった。さらに、チンチャユンガでも、スユントイ〔ヒメコンドル〕の巣で奇妙な石がいくつも発見された。

さてこれ以上、カパック・ユパンキの生涯やさまざまな出来事、それに彼が敵と戦って収めた数々の勝利について触れる必要はない。カパック・ユパンキが数々の勝利を手にしたのは、彼がワカをほとんど重んじなかった人物だったからであり、したがって、もしそのころに、福音の宣教師たちがこの王国に渡来していたら、大勢の人の心を捉え、彼らを福音の掟に導き、従わせていたことだろう。しかし、老いと死が忍び寄り、カパック・ユパンキの行く末を遮った。とは言え、彼はすでに設計していたサクサワマンの砦の建設には着手した。さらに、カパック・ユパンキはビルカノタ、すなわち、ルルカチェと呼ばれるワカを発見した場所から自分の領地にむ

かって標石を置いた。そしてビルカノタから〔クスコへ〕帰る途中、カパック・ユパンキはワロックの人々が崇めていたウィラコチャンパ・ワカと呼ばれるワカや、ヤナコチャのワカ、ランケスパのカオチャコタとヤナコタ、それにチュイトゥピヤ、タンタコパ、ワニントウルポなど、数々のワカも発見した。話によると、その後、カパック・ユパンキは人々に向かって叫んだらしい。「この土地には、こんなにたくさん人を誑かすものがあるのか。ああ、なんてわたしは不幸なのだ。哀れなわが民よ、おまえたちがそのような誑かしから救われるのはいつ、いかなる時代のことなのだろう」と。

結局、カパック・ユパンキはそれ以上ワカを苦しめることなく、クスコへ戻った。と言うのも、当時、ワカを所有しないアポ・クラカなど、ほとんど皆無に近かったので―おしなべて全員が偽りの神に騙されていたから―、大勢の偶像崇拝者の中に身を置くカパック・ユパンキにとり、ワカに害を加えるのはとてもできない相談だったからである。つまり、何百万という偶像崇拝者がいるところで、ワカを侮辱するのは危険きわまりないことであった。

ついに、カパック・ユパンキは身罷り、その領地を長男かつ後継者として、息子のインカ・ロカに残した。彼は息子のインカ・ロカに王国を譲渡するしるしに、直接トパ・ヤウリ、トパ・クシ、トパ・ピチュック・リャオト〔リャクタか。王杓〕を手渡した。

このインカ・ロカはやや短気な性格だったが、かなり無頓着な人物であった。彼はよくクンビという衣服を作るように命じ、また、踊りが大好きで、若いころ、もっぱら踊ったり、飲み食いを楽しんだりして過ごした。さらに、この時代のインディオたちはワカや祠を熱心に崇拝したので、偶像崇拝や儀式が以前にまして盛んに行われた。(と言うのも、クラカたちがワカや祠をたいそう崇めたからであり、何ごとによらず、良いことも悪いことも、土地を支配し治める頭株が良き例を示すか、悪例を垂れるかにかかっており、頭株次第だからである。)

このインカ・ロカには、ママ・ミカイ・チンポとの間にヤワル・ワカック・インカ・ユパンキという長男がいた。彼が誕生したとき、盛大な祭宴が厳粛に執り行われ、広場や通りはどこもかしこも、羽毛のアーチで埋めつくされ、コリカンチャの館〔太陽の神殿〕は、内部も外壁も、一面、カマンティーラやピルコという鳥の美しい羽毛で覆われたという。祭宴では、人々はアイマ、トルマ、カヨ、ワリナ、チャマイ・ワリクサ、アイリ、カチュアと呼ばれる歌を八台の鼓や太鼓の伴奏に合わせて歌い上げ、創造主を称えた。つまり、彼らは以下のように唱えながら、創造主に感謝と賞賛の言葉を捧げたのである。

「さあ、どうぞいらしてください。天と地〔の世界〕を支配する主よ。土で万物を創

り給いし主よ、万物の根源、愛されし人類の創造主よ。わたしは何度もあなたを崇めましょう、曇った瞳を瞬かせながら、あなたの前に跪きましょう。だから、お願いですから、わたしをご覧ください。小川、滝、小鳥たち、すべてがあなたの思い通りに動いています。どうか、もし御心にかなうのなら、わたしに授けられるはずの恵みをすべて与えてください。わたしがいつまでも〔主を〕見上げつづけられるように、力を貸してください。わたしたちはたえずそのことを思い出して、必ず喜びを感じ、変ることなく心はずませることでしょう。」〔原文はケチュア語〕（これは彼らが異教を奉じていた時代によく口ずさんだ歌の出だしである。）

祭宴では、人々は全員、アウカイパタ〔クスコの広場の名前〕で歌を歌っていたが、その間、王子〔ヤウル・ワカック〕は血の涙を流していたという。それは前代未聞の不思議な出来事であり、人々は一人残らず、その様子を見て驚いた。以来、王子はヤウル・ワカック・インカ・ユパンキと名乗ったらしい。父インカ・ロカは息子の身に起きた出来事について説き明かしてくれそうな人物を必死になって探した。当時、彼はワリャウイサ人、コンティウイサ人、カナウイサ人が占いに通じていると聞かされていた。〔真相を突き止めたいという〕インカ・ロカの思いは大変なものだったので、町に入りきれないほど、カウチョ、ライカ、ウモ、ウスクタ、ウイサ〔呪術師や占い師など〕が大挙してクスコへやって来た。〔しかし〕インカは、自分の偉大さが人々に見くびられるのを避けるため、その秘密や疑問を呪術師などに打ち明けようとしなかった。むしろ、インカ・ロカは公然と呪術師など全員を叱責し、「賢人が大勢集まったところで、なんの役にもたたない」と言い放った。

結局のところ、インカ・ロカは、呪術師たちが各自の土地へ戻るよう、いろいろと口実を設けて、体よく彼らを追い払った。そうして、彼は呪術師、交霊術師、魔術師、妖術師がそのまま立ち去るのを許したので、彼らは故郷の村や家に戻ると、かつてないほど勝手気ままに、偶像崇拜に耽り、哀れな原住民たちにも同じように振舞うよう説き勧めた。

結局、インカ・ロカは老衰して息を引き取り、あとに、支配を受け継ぐ人物としてヤウル・ワカック・インカ・ユパンキと呼ばれる長男を残した。ヤウル・ワカックは実に物惜しみをしない、気前のいい人物であった。その結果、彼は赤貧に苦しむことになり、とうとう自分の館を維持するのに必要な経費をあらゆる地方の人々に負担してもらうため、貢物を割り当てなければならなくなった。住民たちはことの重大さを知って、決起し、武器を手に取り、街道を破壊した。インカは、人々がこぞって蜂起したのを知り、しばらくの間静観を装った。するとその後、住民たちはインカが泰然としているのを見て、再び服従するようになり、あらためてインカ・ヤウル・ワカックの寛大さを思い出し、彼のもとにあらゆる種類の贈り物を持参した—と

言うのも、インディオたちの話では、ヤウル・ワカックは実に高潔な人物だったからである。

ヤウル・ワカックは善行を好み、犯罪に関わることはいつも司直たちに任せていたという。罪を犯しても、コリカンチャの神殿に入り込んだ者は罪を免れ、ついで、インカの館に身を隠した者も一泥棒と姦通者を除いて、同じく罪を免れたらしい。インディオたちの話によると、このインカ、ヤウル・ワカックは、罪人が処罰される様子を見なくてすむように、町の郊外に獄舎の建設を命じた。〔そうして建設された〕その監獄がアラフアイ、ウインピリヤ、サンカカンチャであり、そこでは、残忍な刑が執行されたという。

このインカは年老いてから、武器を取り、征服に乗り出したらしい。そのとき、彼はあらゆる種類の鳥の羽でできた衣服と、金や銀、銅でプラプラ〔胸当て〕を大量に作るよう命じた。それは、兵士たちが胸や背中につけて、〔敵の〕矢や槍で傷を負わないようにするためであった。そして、彼はそれらを指揮官や兵士たちに分け与えた。

そのような状況下、ママ・チュキ・チキア・イルパイとの間に、ウィラコチャンパ・インカン・ユパンキという長男が誕生した。母親のママ・チュキ・チキア・イルバイはアヤルマカ出身で、トカイ・カパックの玄孫にあたった。

〔準備万端整うと〕ようやく、ヤウル・ワカックは全土に戦いを布告し、容赦のない戦いを望むかどうか打診した。ことの次第を知った反抗的な地方はインカの決意にかなり怖気づき、結局、クスコに服従し、数々の贈り物を携えて彼のもとにやって来た。そのあと、インカは実の息子である王子ウィラコチャンパ・インカン・ユパンキの誕生を祝う祭宴を催し、道化役者（アニャイサオカ、アヤチュコ、リヤマリヤマ、アニャムシなどと呼ばれる）たちが芝居を演じた。

このインカは兵士を率いてクスコ近郊へ向かったが、干戈を交えたためしなかった。

（次号へつづく）